

新 おおさか KEYワード【第20回】

こんなアイデアどないだと競いあう 趣味人、趣味家、本気のしゃれ文化

新年に、近代大阪で流行した御目出度い「宝船」を紹介しよう。節分の日に七福神が乗った「宝船」の絵を枕の下に敷いて眠ると、良い夢を見るときとして信仰された。その歴史は古く、「浪華宝船会」によって大阪で盛り上がった。昭和4(1929)年に第1回が開かれ、昭和15(1940)年ぐらゐまでつづいたらしい。

「浪華宝船会」を結成したのは、郷土玩具や納札などを愛する「趣味人」「趣味家」と呼ばれる人たちであった。商人や会社員、画家、落語家など職業は様々だが、昭和初期の“大大阪”の成立で近代化が加速するなか忘れられてゆく童心や稚気を愛し、個性を尊重して「趣味」の世界に没入した人たちである。サブカルチャーに関心を寄せる現代の“オタク文化”にも通じるかもしれない。

「浪華宝船会」のルールはこうだ。会員は個性溢れる「宝船」を制作する。会員同士の交換会の後、節分に「宝船」の頒布所を設け(他の会員と共同でも良い)、紹介状をもらった人が、御朱印のように市内各所に散らばった頒布所を巡って「宝船」を集めるのである。第1回の頒布所は34箇所だったが、第4回には74箇所に増え、「宝船」も111種類が用意された。

一癖ある「宝船」を紹介しよう。まずは表紙の「宝船」だ。昭和8(1933)年の第5回の頒布と思われ、市章の滯つくしと難波橋のライオンが帆に描かれ、工場(造幣局か)の煙が「たから」と読める。切符を船にする「見立て」や「うがち」の趣向が凝らされ、波は車輪、船は乗り換え切符で、左端の三角形は築港付近の路線図である。

浮世絵師の長谷川小信(1888~1963)にこの絵を依頼したのが、図にもある「乗車券蒐集者の山本不二男」である。洒落で互いにお寺ふうの名を名乗った「浪華趣味道楽宗」という会でも、「交通山愛券寺」を号した乗車券マニアで、小信も注文に応え、洗練されたモダンな感覚を發揮している。

次は昭和12(1937)年の丑歳、おもちゃ絵を得意とした川崎巨泉(1877~1942)が、落語家の三代目三



三代目三遊亭圓馬の「宝船」。昭和12(1937)丑年に川崎巨泉が落語「池田の牛ほめ」を題材に描いた。印の文字もまさに落語の台詞。

遊亭圓馬の依頼で描いたものである。圓馬は大阪市北区大工町出身で、父は月亭文都門下の月亭都勇。東京で真打に昇進するが大阪に戻り、圓馬を襲名した。東西の落語を自在にこなし、上方落語を東京に移植したとされる。

「宝船」に捺された「天角地眼一黒肋頭耳小齒違 圓馬蔵版」の印が、上方落語「池田の牛ほめ」を踏まえている。天角地眼から齒違までが、池田のおっさんの牛をこう褒めろと教わった文句である。牛の臀部には、落ちて用いる秋葉大権現の火除けの御札も貼られている。これが亥歳なら「池田の猪買い」を踏まえた「宝船」となったんでしょな。

そして「七偏人彩華洲宝船」の森田乙三洞(1895~1959)は、難波で「趣味の本屋」を営み、自分でも版画を制作した。昭和7(1932)年の「宝船」の題名「彩華洲」はサーカスの宛て字。パイプをくわえた乙三洞が七福神を肩車し、曲芸を披露する。「MEDETASHI」の印も華やかで、のんきな表情に時代の嗜好と明るさが漂っている。



森田乙三洞「七偏人彩華洲宝船」昭和7(1932)年。中央のご機嫌な人が乙三洞。

他にも「浪華宝船会」周辺には、古代エジプトの壁画の船やローマのガレー船、松竹梅の正月飾りを船に見立てたもの、写楽の「宝船」を写したもの、こけしが帆になった船、桃太郎の桃、南蛮船、ホテル宝船、飛行艇、航空母艦など、多種多様の「宝船」が制作された。

現代に「浪華宝船会」があれば、どんな「宝船」が登場するだろう。一押しが疫病退散の「アマビエ宝船」である。七福神が乗る船や帆柱にアマビエが化身し、令和3年の丑年ならジェンナーの天然痘予防の牛痘接種法、令和4年の寅年は、コレラ流行に由来する道修町の神農さん(少彦名神社)の張り子の寅と共演するに違いない。

筆者プロフィール

橋爪 節也 はしづめ せつや

大阪大学総合学術博物館前館長/大学院文学研究科教授。1958年、大阪市生まれ。東京芸術大学大学院修了。大阪市立近代美術館建設準備学芸員を18年間つとめ現職。専門は日本美術史。展覧会では「没後200年記念木村兼葎堂—なにわ 知の巨人—」「北野恒富展」「没後80年記念佐伯祐三展」などに携わる。編著に「大大阪イメージ増殖するマンモス/モダン都市の現象—」(創元社)など。